

治水條目



水と流るる勢をあるとて舟一葉とん
堤防に色みせく可水とて舟をり地塞の
てたのり地流流る人事の切力多し舟の
そのと腹多し天人のた並りしとて山は
氣と通をるをり舟水塞をり地塞をり
後ふこれを流んと地塞をり地塞をり
舟より舟をり舟をり舟をり舟をり舟をり
舟をり舟をり舟をり舟をり舟をり舟をり

愛知県文化会館

408212

A517
75
2

と可成りいへりてはなれども其後事
あつたはなす可成りの政の病をうけて
大西六福田と有る一國を徳の早稲は
早稲の地洞窟と解して地所の名を
河原のりくおとせしとて一日の切力を
多のきて深草の二重のりくは屋を失
或いはこの利用とせしめて永く
深草のりくをとりてこのりくを
は冊に載せし。其の事目おぼろしき

しとて三十年のりくを横にあらは
しとてとある一國を可成り事あり
ありとて切利と合せて五重の忠のりく
者ハ方力なくしとて一國の事あり
とあり。申あつたはなす二十歳以上
三十歳以上とせしめたるりくを
早稲の上はなす西のりくを
とれたる一國をいへりてはなす
のりくは半りのりくをあらはし

いとも水勢憚る意をよむ其西年一重然
あまーわひんらくしん中をえく三十年の
あせあつて三十年の後をよみくして
も后とて何時の事をもからしむるに流
かたなる事難くしと成余その位たる
此をよみし時川の間をよみしことよ
いともまき之にあら大馬の河野に
あつて此地の理を考へ今亦吾
尾の山勢の二重然と記又あつての官符

の人の情をまじく或は忠義の利をとりまよ
うしてその情を推し且二三のつらものを
よみし時目成代し事しとくしとくし
も其位ふあるに海後河内事此をよみ
あつてよみ吾をよみしことよみしこと
但つて人の子世なる事あるをよみし時
の實とせしと敬まらるる事よみしこと
いへて六年一年一年廿三事ありて十年
とれをよみ大も後をよみ今亦七十有

余嘗於此の愛慕を以て後集の巻
下之巻後をたぐひてを記す。中々平の
海軍の二更と申ひて格神のいふ事
おのつて河指の意をたぐひて裁輔の力
とていふ事あり。たぐひて水と洛と
外に津田と申ひていふ事も海軍の流
流あり。いふ事たぐひて海軍あり。い
ふ事いふ事。いふ事いふ事の切はあり
君子とて本きて道とて海軍あり。いふ事

洛ありあり

治水條目

水勢
晴雨

淺深

高下

廣狹

源委
遠近

清濁

潮汐

順逆
決溢

遲滯
涸竭

堤防

馬踏

腹根數

土壤

強弱
屈曲

高低

草木

防禦

暗雨

堤

繚出堤

猿尾

蛇籠

枕水子

刻

築切

土俵

柵

猪子

梓

重置

腹骨

腰懸

決裂
裂
所由

衝突

渺漫
蛇穴

救災

違井

水留

海用留

用水

井道

伏越

井掛

井斫

井棚

多少

利害

杖
刀
杖

惡水

杖
三
杖

水門

杖

石
杖

水筒

植

札
杭

舟
杭

大小
高下

水門

卜切
築切

立切
植切

大川
堯迪

蛇籠

籠
土
芝

猿尾

堤
石

定井
泥吐

堰
井
堰
了
已
堰

池沼
澤
雨池

濕

扒
官
雀

仕切
堤

橋
大小
唐
狄

板
欄
干
石
土

亂
杭

大雨

芥

旱被

番水

井上

堙塞

天勢

人為

失工

堤外渺漫

浚治

砂浚

謀略

主宰

用人多寡

用具

川濬後民深仰水

堙塞民深

地勢

年曆久近

隣国

俗観

精神

砂除

己亦謀略中ノ大目主宰ノ眼力ヲ要リス

海 救田

田相

堤防屈曲

川

山峽

堤 街道

以上六行八目主宰ノ用心深計際論ス可ラス

計略ヲヨクシテ急速ヲ好スス 幾ク年数ヲ

計テ期ニ後シサルヲ善リス

瀬邊

三十年後大害ナルヲ多カクトス但急難

救フニ暇ナキ時姑ク己ヲ用ルハナカレコトヤス

尤地ヲ擇ムコト

分水

永久ノ策ニ非ズ本流ノ壅塞ヲ益ノ弊アリ

用人 主宰ヲ擇ムコト所アリ

人数

農民 貧民

時節

附論

後治大事

例留

大水自然ノ路ニ隨 各論

新田塞水口

天理 俗觀

策目

治水ヲ論をハ一巳ノ利用ニ非ス國ノ利害
與カレ學者先ツ其邦ノ用ヲ主リ又監ハ一
又リノ患ノ言レ所ヲ如何ト察ス也

但考ル所アリ民胸中ニ藏テテ毎ノ人ノ論
一カラス下ニ察亦曰

今ヨリ後ノ大弊イカト下察スレバノ弊
幾歳ニラハハシラス

今日ノ手段イカニ何知ヨラメキヲ下サレラス

治水の及田園田圃の學を履修すべし
之は後世の傳ふる弟子制は後世の
一々之を傳へ但吾輩も亦治水の
たるを論し出雲の湖等の河を教をこれ
人カキテ學の事ありしを此和漢
の之記載をこれに利ありし之を此
也勢を言ふまれの通ある定見を以て
免るる功を以て海を道との外他利
をこれに事ありしを此を以て

更氏と傳ふに、凡そ及んで、
 核邦と通すあり、余二十五年、
 かしこ身、おふし、まゝ、
 乃、今、七拾、餘、年、
 定政六年、秋、九月、

書

條目解

條目解

有、東、堤、介、等、
 と、堤、白、木、
 梓

歳末
御書
と、
 四方、柱、
 中、石、
 三、
 井、
 三、

ヲ云松ノ御ニハレタリ

猪ノ子

乃押流海島。松尾三平三ツ屋五郎外
カケルノ柳とカケルノ上ノ石俵ヲヨキ流ル

透井

ニあり地カノ一ノハシ流ル松ノ川ノ
子

松ノ子ハ流ル松ノ川ノ

川邊ノ松ノ村ノカケルノ川ノ

松ノ川ノ松ノ村ノカケルノ川ノ
カケル

カケル

カケルノ松ノ村ノカケルノ川ノ

松ノ村

カケルノ松ノ村ノカケルノ川ノ

井ノ

カケルノ松ノ村ノカケルノ川ノ

井初

初井

上の儀事いふと松本と松平の正河松三子と
と松平の正河松三子と

松平の正河松三子

松平

可成りともいふ

松平

西の正河松三子

松平

松平の正河松三子

松平

西の正河松三子

可成りともいふ

西の正河松三子

可成りともいふ

松平

川西の正河松三子

可成りともいふ

川西の正河松三子

植

川向ふ司方を北河を日多様く川上

際
際際

海力の新田にあり海の傍地をくく思

汝さ一匹の田にあり海にありとありあり

ありあり

之切

司方よりあり川中へなるなるなるなる

ありあり

汝垣

木竹の河川あり又ありありありあり

ありありありありありあり

定井

川中へ石と竹と板とありありありあり

とありありありありありありあり

定井とあり

池
井池あり

定井とあれ〜〜〜〜〜
うの海へ帰

雨地

川〜〜地と拾〜〜と海〜〜

雀入

吾地〜〜地口〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜

司〜〜〜

井上

堰〜〜〜

おる門〜〜早〜〜〜
〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜

竊に庵の水鏡をあたはるるまのちのちの
宮の末はとてその二川の先申
今地を築くも一とてその先申
すりてその先申してその先申
して其の先申して其の先申
欲する人か其の先申して其の先申
か其の先申して其の先申して
その先申して其の先申して
流るる水鏡をあたはるる

十年と厚く蓄積し復き一推し
易一田木はハカ所を一と
大川のあり水多きをハカ所を一と
勢と回一ハカ所を一と
元文の頃の比の水勢今をハカ所を
おとハカ所を一と
これを流すのハカ所を一と
ハカ所を一と
ハカ所を一と

多くと神の力をこれと流すハカ所を
今の大意を成にハカ所を
ハカ所を一と
ハカ所を一と
ハカ所を一と
ハカ所を一と
ハカ所を一と
ハカ所を一と
ハカ所を一と
ハカ所を一と
ハカ所を一と

西申六月十日

洛水の事ふあはしむ時措の意とて
政治の施を言ひ移移の趣を言ひ又
その事力の海原の事とてく一移移
思ふは色ハク一は余信て言を言ふ
あはしむ力はされし事とて疎くして
言一はと施を言ふとて言を洛水と志ある
者も吾邦を言ひ上川お從來しある
と起地所と志言一は又城を言ふあはし
め

ゆえその意然とてく一は政治の利害を
言ひて解熟の考もく一
一所と熟の起を言ひ他所と志推もく一
一と志考ふ言ひ志の海原もく一志のゆえ
才力とたのひた言ひ志道義のゆえ
一と志考ふ言ひ志の海原もく一志のゆえ
かすく熟考せし言ひ洛水もく一
言ひもく可き

文化十四七年九月廿三日夜寫之

山中寬紀

此書為永五申年作下十卷政六
寅年再考者一也每冊有十
年字及後也他九二冊有同三下十
文勢二十六八兩處有と云定政年

方光がらむはとま
あふらのすう有る且籍屋の
と葉まの文ハある丹の末
中し万申とあるハ別安
あるな

愛 知 県



1104082125

517

ナ5

2